

道元禪師と『大智度論』

永井賢隆

はじめに

道元禪師が受容した経論の中で特に注目されてきたのは、『法華経』と天台教学の各典籍であると考ええる。事実、禪師の著述において、『止観輔行伝弘決』（以下『輔行』）の引用は論書として最も多い。従って、著者荊溪湛然の見解が禪師に与えた影響は計り知れないであろう。

ところで、『輔行』の次に引用が多い論書は『大智度論』（以下『大論』）であることが知られる。禪師における龍樹の評価について言えば、「仏性」巻をはじめとして、単に伝灯歴代祖師の一人ということではなく、釈尊の法を一人挙揚し、解き明かした一大祖師として評価されている。

私見に依れば、禪師はその著述・説示中に『大論』を三十七回引用している。その内、十九例が十二巻本『正法眼蔵』であり、引用も長文であることが指摘できる。ちなみに『宝慶記』における三例の引用は如浄の言葉であり、道元禪

師自身が、その意識のもとから述べたものではないことも一言しておかねばなるまい。

本稿では特に十二巻本『正法眼蔵』「発菩提心」巻の引用を中心として、『大論』の受容意識を解明したい。

一

次に示すのは『十二巻本』「発菩提心」における一段である。

世間の常法にいはく、たとひ生ずれども熟せざるもの三種あり、いはく魚子・庵羅果・発心菩薩なり。おほよそ退失のものおほきがゆえに、われも退失とならんことを、かねてよりおそるるなり。このゆえに、菩提心を守護するなり。菩薩の初心のとき、菩提心を退転すること、おほくは正師にあはざるによる。正師にあはざれば正法をきかず、正法をきかざればおそらくは因果を撥無し、解脱を撥無し、三宝を撥無し、三世等の諸法を撥無し。いたづらに現在の五欲に貪著して、前途、菩提の功德を失す。あるひは天魔波旬等、行者をさまたげんがために、仏形に化し、父母・師匠、乃至親族・諸天等のかたちを現じて、きたりちかづきて、菩薩に

むかひてこしらへすすめてはいはく、仏道長遠、久受諸苦、もとも
うれふべし、しかし、まづわれ生死を解脱し、のちに衆生をわた
さんには。行者、このかたらひをききて、菩提心を退し、菩薩の
行を退す。まさにしるべし、かくのごとくの説は、すなはちこれ
魔説なり。菩薩、しりてしたがふことなかれ。もはら自未得度先
度他の行願を退転せざるべし。

傍線を附した一文は、北本『涅槃經』「聖行品」（以下『涅
槃經』の引用は全て北本に依る）と『大論』「報応品」にあるた
め、どちらが出典であるか判明していない。ちなみに、この
一段の前には、『涅槃經』における「菩提心の守護」につい
ての引用がある。また、その後には『大論』から「仏道を障
礙する四種の魔」についての引用があり、これを勤學し菩提
心を退転させないことが説かれている。該当部を比較すると
以下のようなになる。

『涅槃經』聖行品

『大論』「報応品」

譬如魚母多有胎子成就者少。如是事難辦、何以知之。如魚子、
菴羅樹花多果少。衆生發心乃有 菴羅樹華、發心菩薩、是三事因
無量。及其成就少不足言。 時雖多、成果甚少。

両者ともほぼ同趣意である。則ち「因」は起こるが、それ
が「果」として現成することは難しいというのである。単純
に語句の異同からすれば、『大論』に引用部の典拠を求める
ことが出来よう。しかし、ここで問題となるのが傍線部に続
く「菩提心の退失」についてである。『涅槃經』では菩提を

退転させる法として十三法を説き、菩提心を破壊する法とし
て六法、また菩提心を退転させる法として七法を説く。その
中で、発心した善男子がその菩提心を退転させる様子を次の
ように説く。

聞菩薩阿僧祇劫修行苦行。然後乃得阿耨多羅三藐三菩提。聞已思
惟。我今不堪如是苦行。云何能得是故有退。

このように、自らの思惟により菩提心を退転させることが
説かれる。また、「五欲を貪樂」し、「三宝を恭敬しない」こ
と、「生死に虚在することを樂う」こと、「煩惱をよく壊する
もの無し」と思惟することも菩提心を退転させる法として説
かれている。これらは「發菩提心」の該当部では、「正師」
に会うことが出来なければ起こる事として拈提されている部
分に相應すると言える。しかしながら『涅槃經』では、

若遇善友諸仏菩薩聞説妙法。則得發於阿耨多羅三藐三菩提心。如
其不遇則不能發。所謂須陀洹斯陀含阿那含呵羅漢辟支仏。…三者
若遇不遇一切悉能發阿耨多羅三藐三菩提心。所謂菩薩。

とあり、菩薩は善知識に参じなくとも、発心が出来ることが
説かれているのである。また、さらに次のようにもある。

發菩提心者。若遇善友諸仏菩薩諮受深法。若不遇之皆悉当成。何
以故。以其能發菩提心故。

発心の菩薩は、善友、諸仏菩薩に参じなくとも、仏道を成
ずる事ができるというのである。このように『涅槃經』では

發菩提心に關して、正師の存在は必ずしも絶対条件ではない。しかし、先の説示を見ると、禪師が現実に即して、善友、諸仏菩薩、正師の必要性を論じていることがわかる。従って、この点においては禪師は『涅槃經』の説とは異なる立場にあるといえよう。

それでは、『大論』では菩提心の退失についてどのような論じているであろうか。まず初發心の菩薩について『大論』では次のように述べる。

菩薩初發心來所行因緣、所得果報、是阿鞞跋致、受記必當作仏。

菩薩は初發心から行ずる因緣によつて阿鞞跋致菩薩となり、受記によつて作仏するというから、菩薩が段階的に論じられているといえよう。言わば、理想の菩薩となればそれは不退転であるが、行による因緣が熟す以前は退転の可能性を含んだ菩薩といえるのである。『大論』では、その具体的な差異について次のように論じている。

餘人所修福德、但自為身、小菩薩雖為衆生、亦自為己、阿鞞跋致諸所作福、皆為衆生、不為其身。

福德を衆生の為に為すのが菩薩であるが、その全てを向けるか向けないかにより、菩薩に段階を認めている。問題となるのは、一切の福德を衆生の為に向けることの出来ない未完成の菩薩である。その菩薩のあり方としては次のように論じられている。

道元禪師と『大智度論』（永井）

有菩薩雖未得阿鞞跋致、福德利根、智慧清淨、常隨善知識。

この一文は、般若波羅蜜を信受する様子を眞の菩薩、阿羅漢、学人、菩薩と並べ、その信受のあり方を論ずる一段である。未完の菩薩は、その信受において「善知識に従うことが必要である」と論じられている。このように未完の菩薩は、他からの教授を必要とするのである。なぜならば、未完成という流動的な状態においては「若し阿鞞跋致を得ざれば、魔は則ち種種に破壊す」と説かれるように、魔からの干渉を許してしまい、その菩提心を退転されてしまう恐れが懸念されるからである。魔は様々な形相を以て菩薩を退転させようとする。

惡魔來作比丘身、語菩薩言。是六波羅蜜皆是生死道。布施等福德因緣故、欲界中受福樂、禪波羅蜜因緣故、色界中受樂、是般若波羅蜜無定相故、名虛誑法、廻轉五道中、不能自出、是生死道、人誑汝言是一切種智道。我今實語、汝取涅槃、今世盡苦。

このように、六波羅蜜を虚妄の法であるとしたりするのである。それ故に輪廻を脱することが出来ないことになる。眞の法とは、まず涅槃に住する事であり、もしそうでなければ一切の苦を受けるのである。魔はそうように菩薩を退転させようとするのである。この魔が言う所は、「仏道長遠、久受諸苦」に該当するであろう。このような魔について、『大論』では「魔事品」で詳細に説かれるのであり、それは先に引用

道元禪師と『大智度論』（永井）

した「発菩提心」巻の一段に続く「魔有四種」という『大論』からの引用へと繋がるのである。

二

以上、十二巻本『正法眼蔵』「発菩提心」巻における、『涅槃經』を引用した「菩提心の守護」に関する拈提について考察した。傍線を附した「たとひ生ずれども」からなる一文は『涅槃經』、『大論』に共通して同趣意の文が存在し、初発心の際に正師の必要性については『大論』の説が基底となっており、「おそらくは」で始まる種々の撥無に関しては『涅槃經』の説が基盤となっていることが推察出来、また「魔による菩提心の退転」に関する言葉は、『大論』を下敷きに説かれていたことが確認できた。この拈提において、禪師が『涅槃經』と『大論』、両者の説を混在させながらも、後半に下るにつれて『大論』の論説を中心に説示を行っていることが確認できた。

『涅槃經』では菩提心における「成仏の因」としての側面を重視し、利他の実践に関しては詳述していない。勿論、『涅槃經』で説かれる菩薩に利他行がないわけではないが、菩提心と利他の関係から言えば、『涅槃經』における菩提心は、『正法眼蔵』における菩提心と乖離したものであると言えよう。一方、『般若經』の「五種心」が説く「一切衆生を捨てない」

という誓願と、その実践を踏まえ成立する『大論』の菩提心は、利他をその主眼とし、現実に即した菩薩の有り様が説かれていえる。

これは『涅槃經』の引用から『大論』の引用へと続く一連の説示の中で、同趣意の一文を繋げて論じることにより、理念を重視したとも言える『涅槃經』の菩薩のあり方から、実践に即した現実的な菩薩のあり方を論じる『大論』に意識を展開させていえると言えよう。禪師の「われも退失とならんことを」という一文が、この現実に即した内容への転換を示唆していると考える。少なくとも禪師は、巻を通じて「理念としての菩薩」ではなく、「現実に即した実践的な菩薩」になることを重視し、これを強調して論じていえるのである。（細註省略）

〈キーワード〉 道元、『大智度論』、菩提心

（駒澤大学大学院）